

12kの思い出と「Stella Epoca」 by sawako

「Stella Epoca」は sawako の 8 年ぶり 6 枚目のアルバムであり、12k からは「Hum」(2005) と「Bitter Sweet」(2008) に続いて 3 枚目のリリースとなる。そして、今年 2022 年は 12k の 25 周年。

音楽つながりの人たちは特に出会った頃の印象が強く、音楽を通しお互いの動向を感じていることもあって、オフラインで数回しかあったことがない人や、月日を重ねて数年ぶりにあった際でも、近所に住んでいる幼馴染のような親しみを感じる人が多い。

というわけで、時間を 2002 年へ巻き戻し、当時よくコラボレーションをしていた Andrew Deutsch の推薦で、彼が勤めていた Alfred 大学の Institute of Electronic Art でのアーティストレジデンシーが決った事からストーリーが始まる。

やりとりの中、ある日突然 Andrew から「sawako は絶対 Taylor Deupree と会うべき！」とメールが来てテイラーを紹介してくれた。

* * * *

当時の私の中では「テイラーって (Kim Cascone 主宰の) microsound maillinglist で、時々投稿している人だな」というおぼろげな記憶程度。家の CD 棚を見たら、shuttle358 と sogar と 1999 年にリリースされたコンピレーション「aiff」(特殊ジャケット好き&*0 ファンだったのです) を持ってた。「sawako の音は 12k というより (当時は 12k のサブレーベルだった) Line だよなあ」と思いつつ連絡をとってみると、ちょうど、テイラーが近々日本に初来日するとのこと。それで、東京で会うことになった。

2003 年 1 月、テイラーが、Richard Chartier や Sogar と一緒に来日。六本木ヒルズ以前にあった Think Zone と青山 Sputnik Pad でイベント。(後に当時 Sputnik Pad の店長は、現 gift_の池田史子さんだったということを知る) 雪の東京でテイラーたちと一緒に遊ぶ。Sawako がリリースした 7 inch CDR をテイラーに渡したら、翌日、まっすぐじっと目を見て「小さい音が好きなんだね」と言われた。当時東京に小さい音好きな友達があまりいなくて、話があう人は海外の maillinglist ばかりだったので、「小さい音の友達ができ嬉しいなあ」と思った。SNS が普及する以前のこと。

2 月、Alfred 大学出のレジデンシーの帰り道に、今度は私が初めて NYC へ。LES に当時あった Tonic で DJ Olive とカジワラトシオさんがオーガナイズしてた「Phonomena」でライブ。Alan Licht さんと秋山徹次さんが対バン。真冬のニューヨークでテイラーと再会しスタジオを訪問。その頃の 2003 年の 1 月から 5 月までの出来事が元になって、2004 年にテイラーが Spekk からリリースした CD が「January」で、sawako のピアノと声が使われている。テイラーがコンピューターの中の frozen sound からオーガニックな世界へ広がりつつあった時期のこと。

7 月、ICC「サウンディング・スペースー9つの音響空間」展でテイラーとリチャードが再来日。同展の前後は東京のあちこちで出展作家関連のイベントが開催されていて、様々なサウンドアーティストが混ざり合う現場に立ち会うことで、大いに刺激を受けた。オープニングでテイラーとアルヴィン・ルシエさんとカール・ストーンさんと 4 人で談笑したことは、当時はまだ CD アルバムのリリースがなかった私にとって励みになった。

10月、2枚組のコンピレーション「Two Point Two」で sawako が 12k から初めての音源を発表。sawako の音が入っていたのは、12k Disk だったので「sawako ちゃん、Line Disk じゃないんだ」ってみんなにびっくりされた。私もびっくり。その時に、Line ではなく 12k Disk に入れてもらえたから、もっとポップな音（当社比）にしよう、それでもいいんだ、という方向性が定まった気がする。

と、スラスラと時系列順に並べてみたけど、実際は今回 google などで当時のことを発掘しながらこの文章を書いた。改めて振り返ってみると 2003 年の 1 年だけでもギュッといろんなことが起きていて、書ききれなかったことがたくさんある。

そして、その後も走馬灯のように、あっという間に 20 年が経ってた。

びっくり。初めて東京で会って一緒に遊んだ時に、原宿の shop33 系のお店で買ったお洋服、まだ持っているよ。

それで、今回のアルバム「Stella Epoca」のこと。

「Stella Epoca」のテーマは「惑星運行」。

初めからこのテーマで作り始めたわけではなく、ある程度曲ができて「どうやって、まとめよう」と考えていた頃、ちょうど星や暦を意識するような出来事が重なって、このテーマへと辿り着いた。

世界中の人々が自由に旅ができない時期に、空に想いを馳せながら、宇宙の星々に乗って旅をしているような気持ちで仕上げた作品。

星の軌道は花のような形を描いているという話や、エジプトや南米など古代の星にまつわる神話に興味があったことも関係しているかもしれない。アルゴリズムミカルなもの・数学的なもの、と、自然界や宇宙との繋がりは、学生時代から意識してきたことでもある。

惑星の配置と巡りあい、星が描く夜空の景色は常に移り変わっている一期一会のもの。宇宙各地からの星たちの光の波は地球上の私たちに降り注いで、共鳴しながら、それぞれが毎瞬、その時だけのオリジナルな軌道をキラキラと描いてる。ディスクに刻み込まれた音の波は、時空を超えて、銀河に広がる周波数の果てしない流れの中で、倍音共振しながらオーケストレーションを奏でていく。

「Stella Epoca」は、2020 年 12 月に録音された、京都での青木隼人さんによる冬至の夜明けの演奏と、アルゼンチンでの Federico Durand による皆既日食のフィールドレコーディングに、月の満ち欠けや暦にあわせて各地で録音された sawako の声といったサイトスペシフィックな録音が混ざり合った 1 曲目「Eclipse Dawn」から始まり、様々な時空の音の旅を経て、Federico Durand の皆既日食の録音と sawako の電子音による 14 曲目「Field Memory」へと戻ってくる。

太陽が月と重なり合って隠れ始め、また光が戻ってくる時間。それは、一瞬で、同時に、永遠で。ささやかな日常の輝きに光をあてて、同時に、宇宙や森の雄大な時空間に包まれるような。聴くたびに新しい情景が紡がれる万華鏡のような音物語。空に放つ。

星の新世紀。

フランスの Baskaru からリリースした前作「nu.it」から気付いたら 8 年。haruka nakamura さんや ARSAKI Shin さん、早川幸子さんなどの音は、8 年の間の共演体験や響きの交流がきっかけになっている。2021 年 2 月、アルバム制作中に清澄白河 gift_lab で開催した one day happening & exhibit & performance「星星の機織り」は、クレジットには入っていないけど、私の中では今回の作品の一部だと思っている。2022 年夏、ジャケットデザインが決定した後、アートワークを提供して下さった kynd さんから数年ぶりに帰京来日のお知らせがあり、一緒に新潟県十日町にある山ノ家の 10 周年記念パフォーマンスと展示ができた事も、アルバム制作の個人的なハイライトの一つだ。

スープみたいに、日々の思い出を継ぎ足し継ぎ足し、レイヤーを重ねたりコンボリレーションしたりしながら、生まれ落ちた音たち。

想いで記憶は混ざり合って上書きされていく。音の粒を虫眼鏡で見るように探っていくと、その時の思い出の断片が浮かび上がってくるのだけど、臨場感とともに、古ぼけたアルバムの写真を見ているような、煙の向こうで揺れてる蜃気楼のような、不思議な感覚。

ノンフィクションでできているフィクション。

8 年前につくり始めた時のみんなが、全員元気であることとか
20 年前に出会った人たちが、今もものづくりをしていること
そんなみんなと出会って時と音を重ねている奇跡、奇跡

何万光年も離れている星から、光の波が地球に届くころには、その星はすでにもう、消えて無くなっているのかもしれない、軌道が一瞬だけ交差した、瞬間に、結んで開いて、また結び、銀河通信電波キャッチ、受け取ったバトンは、輝き、羽ばたき、円相流転。風に乗って、流線型の星の声をきく。

大空に無数に輝く星星の運行や巡りあい思いを馳せていると、100 年 1000 年、瞬きしてたら一瞬で過ぎてしまいそうで次はどこへ旅に出ましょうか？ どんな未来を描きましょうか？

音の波蕪に包まれて、日々の旅路のお守りになったら幸いです。
皆さまと今ここで、こうして巡り会えたことに、感謝をこめて。

2022.11.4